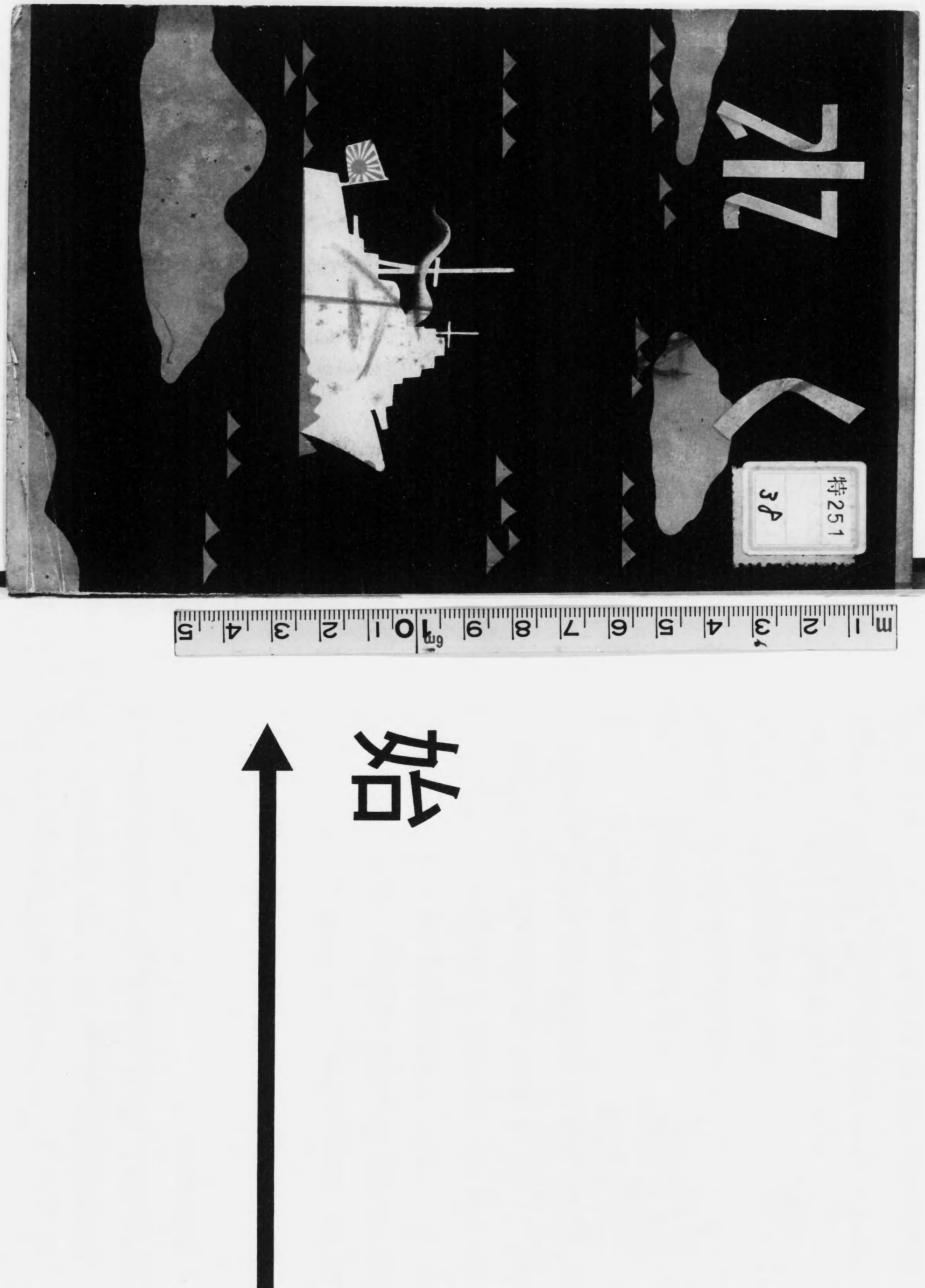

717
特251
3P
前

特251
38

吳市

二五九七

帝國圖書館藏

二河峡スケッチ（藤田嗣治）

目次

1 吳市の位置及地勢……一
2 吳市の今昔……一
3 行政機構……三
4 市會其他名譽職……四
5 市の財政……五
6 交通運輸……七
7 教育とその施設……九
8 衛生から見た吳……一二
9 社會施設と吳……一三
10 躍進途上にある吳の產業……一六
11 金融……二四
12 上水道施設……二五
13 吳海軍の偉容……二六
14 吳及近郊の名勝……二九
15 吳市歌……三四

吳市の位置及地勢

吳市は世界的海上公園瀨戸内海に臨んだ廣島縣西南端の一角を占め面積四八・六五方粁に及んでゐる、背後は秀嶺灰ケ峰を主峰とする九嶺の山々で圍まれてゐるので嚴冬の折柄寒風を避け、前面の吳灣は江田島及能美、倉橋の島々に抱かれて繪の嚴島をさし招き、酷暑の候となれば冷風絶えず吹き寄せて涼味また盡きず、四季を通じ季候は極めて温順で天然の樂土をなしてゐる。

昔の吳

吳市の今昔

"昔の吳"　本市の發祥が遠く中古期以前にあることは舊記その他の實證によつても明らかであるが、近代科學の粹を蒐めた大軍港都市となつたのは僅々三四十年間のことである、明治初年までは宮原、和庄、莊山田、二川の四ケ町村に分れ、天惠的に肥沃の地と豐漁の海を擁し、住民の生活は比較的豐かであつたが、地勢的に交通の便を缺いでゐたゝめ他鄉との交易なく、文化の程度は極めて低かつた。

"軍港となつた前後"　ところが明治初年に於ける我が國運の進展は第二第三海軍區の必要に迫られ、明治十六年には突如として吳灣及びその近海の測量が始められ、それ迄は平和に明け暮れた吳浦の住民を驚かせた、文化の恩惠に薄かつた當時の住民の内には、此事を以つて一大事の突發と誤解した者も多く、流言蜚語さへ加へられて人心恟々たるものがあつたが、やがて吳浦に軍港ができ第二海軍鎭守府が置かれることが知れたので、昨日の憂ひは忽ち喜びの一色に塗り代へられた、翌十七年には有栖川宮威仁親王殿下の御親察を仰ぎ、更に明治十八年には長くも　明治大帝の御臨幸のことがあつて愈々第二海軍鎭守府を此の地に御決定、明治十九年を以て前古未曾有の大工事は起され一躍天下美望の地となつた。

全景

"鎭守府開廳式"　かくて五ケ年にわたる大工事も明治二十三年四月で竣工し、長くも　明治大帝には再度の行幸を仰出され同月二十一日　大帝御親臨のもとに鎭守府開廳の式を擧げられたが、こゝに於て大吳市建設の基礎もまた固められた。

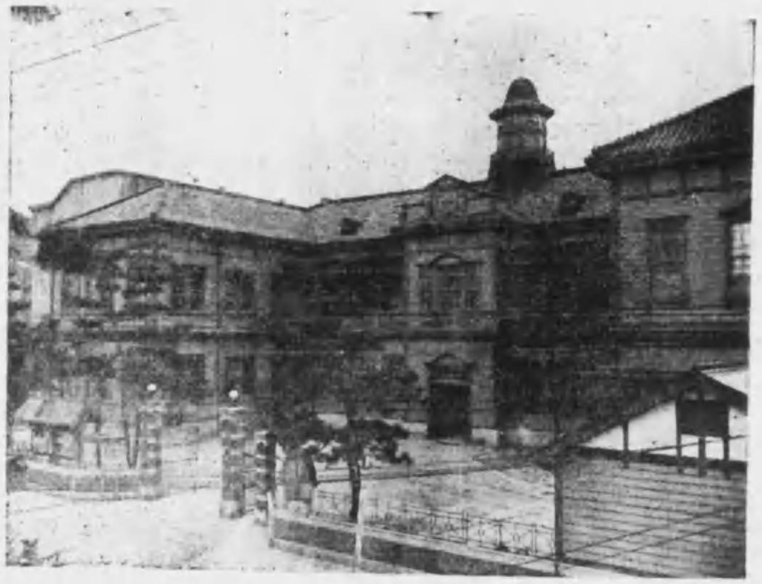
"市制執行とその前後"　これより先、明治二十一年四月一日市町村制が公布され、縣當局は宮原、和庄、莊山田および吉浦の一部の合併を諮問したが、住民の輿論は之を許さなかつた、そのうちに明治二十七八年の戰役が起つて、軍港の擴充は日に夜を繼いでつゞけられ明治二十年頃には戸數三千餘、人口一萬五千を出でなかつたものが日

清戰役を經た明治三十一年には人口四萬、戸數も八千を超える驚異的激增を見せ、更に伸びゆく新興都市の勢は同三十五年には戸數一萬四千人口六萬を算するに至り、同年十月一日を以つて多年懸案となつてゐた吳浦四ヶ町村の合併を遂げ吳市と呼んで市制を執行した。

"最近の吳"　市制を布かれた當時の吳軍港は日露大戰を控へ軍備の大擴張が行はれてゐたので市中も亦軍需景氣に煽られて益々膨れ、つゞいて起つた歐洲大戰その他の事變は事毎に吳市の發達を促したが市民も亦孜々として市勢伸張に努めた結果昭和三年には臨接の吉浦、警固屋、阿賀の三町を合併して人口も一躍十七萬六千二百三十四、戸數三萬七千三百五十となつて名實共に大吳市を出現し、更にも一九三六年後に來る世界的危機に直面してゐるだけに昭和六年以來起つた滿洲、上海事變の餘波は恰は晝夜を分たず續けられてゐるが、本市は我が國防の中我が國民の非常時意識に拍車をかけ、各種工作は心をなす軍都であるだけに軍部の活況も目醒ましく、これと緊密な關係を持つ市中も亦非常時景氣の波に乘つて今や全國稀に見る好況を見せ、昭和十年末には四萬七千二百八十の戸數と二十三萬一千三百三十四の人口を擁し、交通運輸の驚異的發達と相俟つて多幸多望な躍進をつゞけてゐる。

行政機構

明治三十五年十月一日市制を布かれて同日開廳、翌三十六年二月初代市長佐久間義一郎氏が就任し諸機構全く成る、爾來三十五星霜、本市は海軍の驚異的發達と共に一大發展を遂げたが、市政も亦愈々複雜となつて開廳當時は七十名に過ぎなかつた廳員も今や三百に餘り、廳舍も次々增築擴張して來たが尙狹隘を感じるので昨秋巨費を投じて正廳左へ三階建（地下共四階）鐵筋コンクリートの附屬廳舍を建築



更に正廳並中央廳舍の增改築を完成した、然して市制事務の運行は都市發展に重大な關係を持つので、これが圓滿な運用を期するため、その組織編成は從來幾多の變更改善が行はれたが現在では市長、助役、收入役の下に十二課を設けて事務の統一、能率の增進を圖つてゐる、又上水道擴張計劃に關しては特に擴張部を設け擴張計劃を專行してゐる。

市會其他名譽職

本市は明治三十五年四選擧區議員定數三十六名を決定三階級に分けて議員を選出してゐたが、選擧權の擴張に伴ひ大正十年小選擧區の撤廢を劃した、しかし成功し得なかつたので、漸進主義をとつて大正十二年二級制に改め、翌十三年の市會は遂に小選擧區を廢し、更に昭和三年には臨接の吉浦、警固屋、阿賀の三町を編入し定員も四十名と定めたが、限りなき本市の伸張は更に昭和十一年十一月の選擧より定員を四十四名に增加するに至つた、なほ名譽職參事會員は十名の定員で市政の樞機に參

興し、この他學務委員十名、勸業常設委員十七名、土木常設委員十六名、戸數割調査委員二十一名、都市計劃廣島地方委員會委員六名、臨時財源調査委員十一名、水道調査委員十二名が常置され市政の圓滿なる運行を期してゐる、又各町には二百七十三町總代、百十二方面委員の外衛生組合長、戸主會長等を設けて益々その機能を發揮してゐる。

市の財政

日清日露の大戰を初め數次の戰役事變を經た本市は、海軍の擴充に伴ひ短日月のうちに戸口を激增した結果、各般の施設、事業の急速な實施を促され、市の財政も亦逐年膨脹を續けてゐる。即ち市制施行當時は八萬三千圓に過ぎなかつた歳出も、昭和十一年度一般會計當初豫算では二百萬圓を突破するに至つたが、擔稅者の五割强までは海軍職工と其家族である給料生活者であるのに加へて、その他でも擔稅力の低い者が大部分を占めてゐる狀態であるのに反して、軍港都市としての施設、殊に教育衛生方面には一段の考慮を拂なければならないので、市費と擔稅力の均衡を保つためには多大な苦心が拂れてゐる

諸稅		國稅	縣稅	市稅	計	一戸負擔	一人負擔
市經濟	歳入						
	經常歳入	七六〇、〇六八円	七五〇、八六三円	一、一五三、五五五円	二、六六四、四八六円	五六、三五円	一一、二〇円
	臨時歳入	二、〇二七、七八五円	一、三〇七、五六〇円	七二〇、三三五円	二、〇二七、七八五円	四二、八八八円	八、七二円

備考　本表中諸稅は昭和十年度、市經濟は昭和十一年度一般會計當初豫算による

吳市歳入出決算調書

年次	歳入決算額	歳出決算額			
		經常部	臨時部	合計	
明治三十五年度	二三、二七〇円	二〇、三三九円	二、二四四円	二二、五七三円	
明治三十六年度	九一、六二九	六〇、一四六	二三、六一四	八三、七六一	
大正元年度	三六〇、七〇九	三二一、四一六	三五、一九〇	三五六、六〇六	
昭和元年度	一、七四〇、一一一	八九八、〇四三	五五七、六二九	一、四五五、六七二	
昭和七年度	二、三四二、六二七	一、〇五三、五二〇	九一五、二九三	一、九六八、八一四	
昭和八年度	三、〇六二、四七七	一、〇六四、〇一〇	一、六〇八、二三〇	二、六七二、二四〇	
昭和九年度	二、一九五、三五一	一、一三三、九二九	六二〇、一九二	一、七四四、一二一	

市稅と收入趨勢

都市を出來るだけ利便に、健康に、そして快適にするには幾多の改善施設を要する、從つてその經費も亦漸次累進してゐる。本市は近々三四十年の間に驚異的膨脹を示し、都市的施設も幾多行はれてゐるが地理的關係から企業的の財源がなく、その經費の大半は稅收入に求めなければならない實情で、從つて稅收入に於ても逐年增嵩を餘儀なくされてゐる。

年度	市稅收入額	增加指數	負擔 一戸當	負擔 一人當
明治三十六年度	五三、七七五円	100	三・七六円	〇・八一円

大正元年度	一七〇、六九七	三一七	一、三八	六・九二	一・三八	四・七五	四・九〇
昭和元年度	六九四、〇一五	一、二九一	四・七五	三三・九五	四・七五	四・七八	四・九〇
昭和七年度	八一九、七二五	一、五二四	四・四三	二一・一四	四・四三	四・七八	二四・一二
昭和八年度	八四三、八一五	一、五六九	四・三八	二〇・七七	四・三八	四・七八	二四・一二
昭和九年度	一、〇一九、一九三	一、八七七	四・七八	二二・八九	四・七八	四・七八	四・九〇
昭和十年度	一、一四〇、五九七	二、一二一	四・九〇	二四・一二	四・九〇	四・九〇	四・九〇

交通運輸

三面峰巒に圍まれた本市は地勢的關係から交通の便に薄く、軍港開設前までは僅かに小舟で廣島市に連絡してゐたに過ぎなかつたが、軍港の開設工事が起されると共に大船の出入航路も拓け、つゞいて日露大戰を控へた明治三十六年、吳廣島間に二十六粁餘の鐵道を完成した。その後軍港の擴充に伴ふ產業の驚異的發達は交通機關に表はれ、臨接昭和村から熊野、海田市町を經て廣島に通ずる高地部道路、或は吳と廣を繫ぐ大國道の開鑿等次々と大事業を完成し、海運も吉浦、阿賀及び河原石港によつて阪神、九州、四國方面の諸港と頻繁な取引をしてゐるが、近時滿鮮臺灣地方との直取引も旺盛で大貨物船の入港も多く、大小船舶の出入は日々その數を增してゐる。

しかし超スピートの發達をつゞけてゐる本市產業界にとつて、既設交通機關では尙事足りないばかりでなく、產業發達上にも重大な影響を及ぼすので、市民は豫ねてから藝備南岸を貫く三吳鐵道の全通、吳廣島間を通じる沿岸國道の開鑿、或は阿賀港の築調等海陸門戶の擴大を要望してゐたが、昭和十一年には三吳線（現吳線）の全通を遂げ、吳廣島間國道、阿賀築港また茲數年を出でずして完成する予定であるが、交通機關の完備を契機に產業の大吳市實現が期せられてゐる。

尙市內の交通は河原石から市外廣村に通じる藝南電車を中心に、市街地及近接町村を縱橫に馳驅する各社バス並に二百餘臺のタクシーで全うしてゐる、人力車も少數ながら昔しの名殘をとゞめてゐる。しかしてこれが運賃は大體に於て次の通りである。

バス（一區五錢約一哩半）　△タクシー（一哩半まで五十錢）　△電車一區（三錢約一哩）　△人力車（タクシーより一割方安）

鐵道

驛名	乘降人員 乘車	乘降人員 降車	貨物數量 發送	貨物數量 到着
吳驛	二、四六九、八一六	二、五五三、五八八	九、六九〇	五八、八五八
吉浦驛	七八八、八三九	七八九、六一九	七、八二九	一〇、二〇三
阿賀驛	二九二、八〇三	二七四、八二七	一、三二八	九二一

吳阿賀港貨客表（昭和拾年）

港名	乘降船人員 乘船	乘降船人員 上陸	客員 發	客員 着	貨物 發送	貨物 到着
吳港	三二一、三七九	三三五、四七〇	七、一六二、六一六	七、一六二、六一六	四三、三四〇、六一七円	四三、三四〇、六一七円
阿賀港	四四、四八〇	四一、一三〇	一、三五七、五二六	一、三五七、五二六	四、〇一三、六〇〇	四、〇一三、六〇〇

同出入船舶

港名	年次	汽船	機帆船	帆船	計
呉港	昭和十年	二四、二四九	一七、七一〇	一二、四〇〇	五四、三五八
	昭和九年	二一、九九七	一六、五二一	一三、八一六	五二、三三四
阿賀港	昭和十年	一〇、九一三	一三、二四三	四、四二七	二七、五八三
	昭和九年	一〇、五六五	一一、九四四	三、六〇二	二六、一二一

教育とその施設

世界的大軍港を持つ本市は軍港として適切な教育施設を必要とするので、この方面には特に注意を拂ひ市費の五割以上を教育費に充てゝゐるが、間斷ない膨脹は忽ち次の諸施設を要求するの狀態で、本市教育界の前途も亦多難といふべきである、現在に於ける學齢兒童は三萬三千の多きに達し中等學校生徒數亦六千名を超えんとしてゐる。

	學級數 男	學級數 女	學級數 計	教員數 男	教員數 女	教員數 計	小學校費	兒童一人ニ對スル教育費
尋常小學校	四五一	一四、一七二	一三、六四九	二七、八二一	四五一	三六六	七二三、〇五八	二一、三九円
高等小學校	八七	二、八九七	二、二六四	五、一六一	八七	二四八	六一四	五、三九錢
計	五三八	一七、〇六九	一五、九一三	三二、九八二	五三八	五九四	七一三、〇五八	

市内中等學校

	學校數	生徒數 男	生徒數 女	生徒數 計	學級數 男	學級數 女	學級數 計	教員數 男	教員數 女	教員數 計	經費豫算 經常	經費豫算 臨時	一人當平均教育費
官立	一	一、六七一		一、六七一	三六	八〇	八〇			八〇	六〇、六〇〇		三六、二八円
縣立	二	一、九五一	八七九	二、八三〇	四〇	七二	一七	一七	九	二六	一〇九、八七八		五六、三三
市立	二	八二四		八二四	二四	一五	一五	一六	一四	三〇	三七、〇〇七		四三、一〇
私立	三	一、〇七七		一、〇七七	三一	一六	一六	六八	一	七九	四一、一五六		四四、五七
	五	一、三五〇		一、三五〇	三一	一四	一四	五八	四三	一〇一	八七、〇三七		一五七、二七
私立各種學校	男 六	六六三		六六三	二〇	一〇	一〇	四七		五七	一九、三二五		五一、七一
	女 六	九、六七七		九、六七七	二八	四四	七五	三一		七五	二四、八二四		四九、四〇
計		九、五五二		九、五五二	二一	一三	五〇九	三八八		四六七、五八三	三、二三〇		六一、二八

		學校數	生徒數	學級數	教員數	經費	生徒一人當教育費
青年學校		一三	一、九二八	三〇	八五	三二、六五〇円	一一、七五円錢

		幼稚園數	園兒數	組數	保姆數	經費 經常	經費 臨時	園兒一人當教常費
幼稚園		九	四〇八	二	二六	九、七〇七円	四四三円	二三、七三円錢

	圖書館數	延物坪數	圖書冊數	開館日數	閲覽者數	一日平均閲覽者	經費豫算
市立圖書館	五	三一九・一三坪	三〇、二二五	一、三六二	一三九、七九五	二〇、三人	二〇、七六七円

	團體數 男	團體數 女	團體數 計	團員數 男	團員數 女	團員數 計	經費豫算	補助費	役員
青年團	二	三	三	三、六三六	一、八五八	四、六六二	五、四五〇円	三、三二四円	二
少年團	六		六	一六八		一六八	四〇〇		五
小學校內少年團						二〇、五三〇			

成人教育　市民の社會に對する的確な理解と正鵠な判斷力を養成するため大正十三年修業六ケ月の公民講座を開講したが、更に昭和九年からは修業年限一ケ年の普通學部を新設した、これまた聽講生多く好成績を示してゐる。

	修業年限	科目	講師	聽講生	修了者累計	經費豫算
講座部	六ケ月	法律大意、政治經濟、科學、ト工業、滿蒙文化史、文學、ト國民道德、生活問題	六	八三二	一〇、八六〇	六、七五六円
普通學部	一ケ年	國語漢文、英語、理化學、日本歷史、國民道德、數學	六	一〇一	五九	

衛生から見た吳

軍港都市であるだけに本市の衛生施設は他都市以上の完備を要求されてゐる、本市が傳染病豫防と患者救治に支出する經費だけでも十萬圓を超えてゐるが、尙且つ傳染病患者の增加を見るのは遺憾とされてゐる、殊に昭和九年度の發生數は吳市未曾有のものとされてゐるが、十年度に於ては市民の自覺により幾分の減少を見るを得た本市の衛生に關する施設及傳染病發生狀況は左の通り。

市立病院　消毒部（檢査室、一　消毒室、一　汽鑵室、一　病室、四六　食堂、一　浴室、三　屍體室、一　汚物燒却場、一　動物室、一）健康部（院長醫員控室、三　講堂、事務室、賄所、寄宿舍、倉庫、研究室各一室）を設け院長以下醫員三名、調劑員事務員看護婦等二十一名が當つてゐる。

一般保健設備　衛生監督長の下に衛生巡視十三名が絶ゆず市內を巡視し自動車一臺、馬車十六臺、中車三十臺で一日約一萬貫の塵芥を搬出處分してゐる、更に巡回看護婦四名を派して結核豫防その他に當らせ保健の萬全を期してゐるがこれに要する費用は五萬圓を超へてゐるから馬鹿にならない。

聯合衛生會　市內各町にある百三十八衛生組合を統一して市內の小溝渠の掃除、道路撒水奬勵、傳染病豫防及種痘の普及、通俗衛生講話會、擇善館の經營等衛生思想の普及徹底に努め好成績を擧げてゐる。

擇善館　大正四年二河公園南隅に設立、衛生參考品六百餘點を陳列し觀覽者は一ケ年十二三萬人を算してゐる。

その他　恩賜財團濟生會吳病院、縣社會事業協會診療所、吳救療院をはじめ海軍々人及びその家族のため

には吳海軍病院、工廠從業員のためには共濟組合吳病院が設けられてゐるが、一般市民の診療は市内百六十一醫師、七十五齒科醫があたり、この他に藥劑師五十六名、獸醫六名がある。

傳染病發生狀況

	腸チフス	赤痢	疫痢	ギフテリア	パラチフス	猩紅熱	流行性腦脊髓膜炎	發診チフス	コレラ	痘瘡	計
昭和十年	一九〇	一七	二七九	二〇二	二一八	五七	一	—	—	—	八六四
仝 九年	三一八	二六四	二六五	一一三	一〇	一一八	八	—	—	五	一、一〇〇
仝 八年	三五一	一三一	九一	七八	一〇	五四	四	—	—	—	七一九

社會施設と吳

全國有數の勞働都市である本市は各種社會施設の必要に迫られてゐるが、各方面の活躍で豫期以上の成績を納めてゐる、施設としては恩賜財團濟生會吳病院を初め縣社會事業協會診療所、救療院、託兒所或は施宿所、公設質屋等を設け更に公設市場、住宅組合、市營住宅等によつて一般市民の生活の便宜を圖つてゐる。

吳同濟義會 恤救事業を目的として大正十一年設立、窮民救濟、防貧、教化、兒童保護或は地方改善等の事業を行つてゐるが同會經營の四恩館では託兒、散髮、助產取扱、女子裁縫教授、人事相談等を行ひ、社會館では無料並に簡易宿泊同食堂、勞働紹介、人事相談、思想善導に當つてゐる。

市立職業紹介所一般の部成績

	求人數 男	求人數 女	求人數 計	求職數 男	求職數 女	求職數 計	就職數 男	就職數 女	就職數 計
昭和十年	三、五八七	三、四五三	七、〇三九	三、一八五	二、八三九	六、〇二四	一、七二八	一、七九五	三、五二三
昭和九年	三、五三二	三、二八六	六、八一七	二、八五八	二、二〇三	五、〇六一	一、二〇六	一、三二五	二、五二一

同少年の部成績

	求人數 男	求人數 女	求人數 計	求職數 男	求職數 女	求職數 計	就職數 男	就職數 女	就職數 計
昭和九年	一、五八五	二、二九九	三、八八四	六八三	七二九	一、四一二	五八四	五二八	一、一一二
昭和八年	一、二九九	一、八八七	三、一八六	四六一	八一四	一、二七五	三三九	五五〇	七八九

窮民救護

	世帶數	人員	經費豫算
生活費扶助	一五五戶	三二九	一二、二三七円
醫療費扶助	二	二	五一六円
生活扶助費			一六〇円
醫療助產扶助費			
生業其他扶助費			

海軍々人ホーム、吳海兵寮 共に宗教に基調して軍人に家族的慰安と精神修養の機會を與へる目的で輕費宿泊をなさしめ、各代表者は海兵の母と敬仰されてゐる。

濟生會吳病院　昭和五年開院、巨費の寄附を得て西二河通三丁目へモダン病舍及本館を新築し、内外科、眼科小兒科、レントゲン科、物療科を設け院長以下四醫師、藥劑師一名、看護婦五名で貧困者の救療に當つてゐる。

縣社會事業協會診療所　濟生會吳病院に併置、醫師藥劑師各一名看護婦二名で實費、窮民の救療に當つてゐる。

吳救療院　明治三十六年設立、精神病者監置室二十七、行旅病人二十名を收容し得る施設を以つて、行旅病人救護、精神病者の監置を行つてゐる。

託兒所　大正十一年木造二階建四十坪を設け、滿三歲以上の幼兒を一日三十名内外收容し勞務に從事する家庭に後顧の憂ひなからしめてゐる。

吳保護會、吳保護感化樹德會　宗教に基づいた司法保護事業で、前者は男子、後者は女子を一手に引受けて職を與へ更生へ導いてゐる。

市營住宅　大正十年二十一萬六千圓の起債認可を得て市内北迫町三戸、内神町四十戸、海岸通七丁目二十八戸、宮原通十三丁目へ二十一戸計九十二戸を建設、住宅緩和に資してゐる。

公設市場　大正九年松本町公設市場を設置指定販賣人に依つて日用必需品の販賣を開始した結果私設市場も亦衞生、設備其他市場整頓等に至る迄公設市場式に改革し爾期以上の好績を擧げてゐる、又昭和四年警固屋町にも新設好結果を得てゐる。

公設質屋　大正十五年から事業開始、一口十圓一世帶五十圓を限度として月一分二厘五毛で少額金融に當つてゐる。

レコードコンサートおよび活動寫眞會　市民の情操教育と慰安を兼ね市社會課では大蓄音器を購入、

市内商人より優秀レコードを提供せしめ、毎週土曜日を期し二河公園音樂堂でレコードコンサートを開き、解說者を嘱託し適當なる時機を選んでは活動映寫會を開いてゐる。

躍進途上にある吳の産業

本市は海灣の一角を占めてはゐるがその殆どを軍港に閉され、陸路も亦峻嶮に塞がれて地勢上既に商工發展の條件を缺いでゐるのに加へて市民も亦久しく慣れた消費都市の舊殼を脱け得なかつたゝめ茲十年前までの産業界は實に寂莫そのものであつた、しかし近時産業立市が高唱されると共に各種商業機關も完備して從來の消費都市はこゝに市民の自覺と相俟つて漸うやく生産都市と化し、つゞいて昭和三年以來捲き起された軍縮大整理は更に市民の劃期的覺醒を促しこれを轉機として市内には大小工場を簇立し、引續き擡頭した非常時景氣は本市の企業熱をいよ／＼煽ふり、遂に生産の大吳市を建設、今や年産額は一千五百萬圓を超えてゐる、一方産業の發展に伴ふ交通運輸の發達は物資の集散を益々圓滑に進め年額七千萬圓に餘る商貨を呑吐し藝南地方唯一の大集散市場をなしてゐるが、多年市民の要望した藝備南岸を貫く三吳鐵道（現吳線）既に開通し更に廣島吳間國道の開通、阿賀港大築調完成の曉は更に大量的物資の集散も行はれ大産業都市吳の面目も躍如たるものがあらう。

職業別戸數調（昭和拾年）

職業分類	本業 戸數	本業 有業者 男	本業 有業者 女	本業 有業者 計	本業 無業者 合計	副業 戸數	副業 有業人員 男	副業 有業人員 女	副業 有業人員 計
農業	一、四四九	二、三四五	一、七二七	四、一四二	一、六三二	二、四八九	四、一三二	八、二六三	二、四九三
									二、一九二
									一、四五九
									三、六五一

水産業	三七八	七一九	四五	七六四	五六三	四八〇	一、〇四三	一、八〇七	二四〇	二四八	七九	三二七
鑛業	一九	二〇	—	二〇	四〇	二七	六七	八七	一八	一八	—	一八
工業	二〇、二四五	二九、九九〇	五、一一〇	三五、一〇〇	一三、七六五	二五、二一四	三八、八七九	七四、〇七九	二、五六〇	二、八五〇	八、七六〇	一一、六一〇
商業	一三、〇五七	一六、七七〇	八、四五六	二五、二三六	七、二七四	二〇、三四七	二七、六二一	五一、八四七	二、四〇五	二、五二〇	二、六七三	五、一九三
交通業	一、六五三	一、八〇三	三五六	二、一五九	一、五二三	三、八四七	五、三七〇	七、五一九	九三	八七	一八	一〇五
公務自由業	三、八四〇	三、七五三	三、七二九	七、四八一	二、四三〇	四、二二九	六、六七九	一四、一六〇	三一一	一三〇	二八五	四一五
其他有業者	三、六八五	三、七五〇	二、四四〇	六、一九〇	一、二四〇	四、一二八	五、四六八	一一、六五八	四一四	一五二	三九一	五四三
無職業	二、九五四	二、七八一	四七五	三、二五六	二二、三八六	二二、五〇五	四四、八九一	四八、一四七				
計	四七、二八〇	六一、九三〇	二二、四〇八	八四、三三八	五〇、八七五	八三、三六六	一三四、二三九	二一八、五七七				

生産品に見る推移

文化年度の國郡誌を見ると吳浦の産物は唐黍、黍、琉球芋、蕎麥、楮、綿、麻芋、櫨、澁柿等の農産物、素麺、麥菓子、飴、蠟燭、髮油等の加工品および鰯、煎海鼠、煎鯖、淺利貝、蛤、貝類等の水産物のほかに農間副業として藁綱、繩、草鞋、索綯等が示されてゐるが網糸、繩練、編網等は特に婦女子の手内職とされてゐたらしい、しかし軍港の設置は各方面からの移住者を激増し吳三千石と稱された農耕地も忽ち連檐櫛比の新市街と代り、これを劃期に本市産業界にも亦一大變革が齎らされた、即ちそれまでは農漁業に携はつてゐた人々の多くは海軍職工、或は商業に轉職したゝめ主要生産物とされてゐた農水産物は年と共に激減するに至つたが、新時代の要求に應じて勃興した企業熱は酒、醤油、酢等の醸造

品に、豆腐、蒟蒻、蒲鉾、菓子類、清涼飲料水等日用食料品に或は金ペン、萬年筆、畫鋲、ゴム靴、ゴム製品、石鹸、砥石、製針、皮革製品、罐詰、骸炭、被服、麥稈眞田製品等、近代的色彩を帶びた化學工業製品に移動したが、近來産業立市の高唱される本市には重工業方面を初め各種工場の設立相次ぎ、一時衰微を來した農畜水産物もそれ〴〵指導機關を得て現代人の嗜好に向つて加工改良が行はれ、今や生産額も舊に增しその販路も日に月に拓けて遠く海外にまで進出してゐる。

吳市生産品狀況調

	明治三十五年	昭和元年	昭和七年	昭和八年	昭和九年
農産物	一六八、八〇三円	二四五、五四二円	四二九、八五九円	四四七、二七六円	四九四、八二〇円
畜産物	七二、九四〇	七六三、七八〇	六三四、三七九	七六四、八九九	七〇六、七六九
工産物	五九、一六三	九、〇四七、五〇九	九、八七三、二四五	一〇、七二六、二〇〇	一三、五一一、二一〇
水産物	一四、九六四	二八六、八〇八	五〇一、五〇二	五三二、六三九	五三六、六四九
鑛産物	—	一二、五〇〇	二四、八七〇	二八、四二五	三一、四一〇
林産物	—	—	三、三一七	七、〇五四	四、六四九
計	三一五、八六九	一〇、三五八、一三九	一一、四五一、一七二	一二、五〇六、四九三	一五、二八五、五〇七

工業の吳

消費都市としての長い過去を持つ本市は、數年前までは生産品にも見るべきものがなかつたが、近時産業立市が高唱され、企業熱も益々旺盛となつて逐年工場を激增してゐるが、就中金屬工業の如きは本市振興の根幹である吳工廠の恩惠によつて圓滿な發達を續けてゐる。

主要工産品（昭和拾年度）

品目	生産額	工場數	職工 男	職工 女	職工 計
護謨製品	二六一、五五八円	二	四五	四七	九二
印刷類	五七二、三五〇	二八	一一二	五四	一六六
醬油	三五〇、八九二	三九	八二	七	八九
菓子類	七三五、三〇〇	一五二	三一九	三二	三五一
麺麭類	一八五、九〇五	二八	七七	一二	八九
漬物類	一九五、七五九	一六	三二	一三	四五
製氷	一〇八、九二八	四	二〇	一	二一
萬年筆	一、二〇一、五〇〇	五	二九五	一三五	四三〇
金ペン	一、二八九、二六〇	一一	二三九	一六五	四〇四
砥石	五七五、三二五	二	九五	一二	一〇七
骸炭	七五九、二三三	一	五五	七	六二
製材	三〇七、九九五	六	二四	〇	二四
石鹸	三八八、三六八	二	二八	五	三三
製綿	一七一、二五七	二	八	四九	五七
金屬製品	七五三、八三九	五七	三五三	八一	四三四
洋服	六二六、七六〇	九七	一四二	一二〇	二六二
製氷冷藏器	二七七、五〇〇	三	七七	〇	七七
瓦斯	四一八、八五八	一	五五	七	六二
硫酸アンモニア	二五四、六五〇	一	五五	七	六二
銀砂	一一二、八二〇	一	一〇	〇	一〇
酒類	二、八三〇、八〇〇	一六	三〇二	一七	三一九
其他	一、一三二、六六四				
計	一三、五二一、二一〇				

商業に見る吳

本市は世界に誇る軍港地として、また藝南地方唯一の集散地として、偉大な消費力を持つてゐるので物資の移動も亦頗る旺盛である、就中朝鮮米の如きは内地でも主要な集散地とされ、本市の需要ばかりでなく、清酒その他の特産品と共に他地方へ多量の移出を行つてゐる、それだけに本通、中通の主要街を始め全市にわたる商況は近來益々殷盛を極め、交通機關の完備と共に更に一大飛躍が期待されてゐる

十一年度主要貨物移出入調

種別	移出	移入	種別	移出	移入
米	五六四、〇四九円	二〇、一〇三、九九八円	雜穀	二四、五三一円	一、〇〇四、四三円
麥	二八、九六八	五〇一、六八八	清酒	二、四三五、一三五	六三九、一八五

ビール	五七、〇八一	五六二、五一七	漁網	一〇四、二六四	二八二、八一五
醬油	一七七、四八三	七五六、六三五	藥	二九、五〇二	七七六、八八〇
味噌	九、〇〇六	一六七、九九五	圖書	三三、六一五	五八二、六六〇
果物	一三四、〇八四	一、三三五、七〇二	瓦、煉瓦	六、四〇七	七五〇、二三五
蔬菜	二六、一二九	八七九、一〇四	鐵類	五二八、九五一	二、四一五、三八〇
砂糖	三六、四九六	二、四五三、七八八	銅類	二〇、三〇三	七〇九、一一七
鮮魚介	二一九、〇七八	五、六一四、三五〇	鐵管	一一、四四二	八五七、七五四
鹽干魚介	一四四、三四三	八五三、一九六	材木類	一六一、六九三	三、一六八、七四三
麻織物	七、〇三五	一七八、七三七	石炭	一〇五、九四七	三、〇八七、六〇五
脫脂綿	一〇六、六二一		薪、木炭	二〇、四八〇	一、二六六、三六九
絹織物	一三三、一五六	二、五五三、三三八	皮革製品	六三、七五五	六五七、四二三
綿織物	三六、〇四〇	九二〇、三九〇	セメント	九、一一〇	五七四、六〇五
絹綿交織物	一三六、〇五五	二五八、四〇〇	石砥	三二八、五〇九	九、七〇六
毛織物		四八〇、一九三	コークス	一一、〇八二、一三九	一、八九一、六三二
綿糸	二、三七三、九四六	二、五七五、七四〇	鶏卵	五、〇八一	三四七、四四六
麻糸	一三、九七八	三〇六、六三二	護謨製品	二八六、八五八	六二八、一一三
繩	二九、四四三	六一二、五二八	銑	二四八、二九二	—
和洋紙	四六、五〇二	四二一、九九七	書	五四四、七五〇	八〇五、九一四
陶磁器	三一、八六八	四一〇、五四〇	金ペン	—	四五三、三一〇
履物			石鹸	三三九、八二九	
萬年筆	一、一九五、〇八〇	四、二〇〇	文房具	七二、一〇四	

清涼飲料水	二五、三八一	二九八、六六九	樂器	一一、九七〇	三三四、九五〇
菓子	二八、七九五	一七七、六五一	澱粉及製粉	四四、二九四	三五五、九三五
罐詰類	六三、六四〇	八七七、三二三	石油揮發油	三七、一五一	三五五、三七二
煉乳	五、七七一	三〇一、八〇二	帽子	一五、六〇二	二〇八、八五三
牛肉	二三九、五一六	七六三、三三七	玩具	三、九六一	二四五、四三五
漬物	九三、〇二三	一二五、九四一	其他	—	—
機械	五九三、三八四	一、二四、二三三	計	一三、九三〇、九一一	七八、三七九、三四一
硝子類	一〇、三〇一	三七八、四八三	昭和九年度	一一、八六四、六九四	六四、六〇八、三六四

會社と各種商工組合

近年產業立市の聲高まり、企業熱益々旺盛となつて諸會社の設立各種商工組合の結成相次ぎ漸やく產業都市の風貌を示すに至つた、主なる會社は

株式會社五五（資本金千四百三十一萬一千五百五十圓）—但し會社は資本金五千圓以上▲合資會社一一六▲合名會社四九▲計二二〇▲其他各種商工組合は法定組合九組▲のほか任意組合七十五に及んでゐる。

吳と農業

吳浦は所謂吳三千石の一鄕で、住民の八割までが農民であつたが、軍港の設置は忽ち農耕地を縮め、市制の執行された明治三十五年頃には、田畑合して五百町歩となり、更に昭和二年頃に至つては僅かに三百町歩を綾すのみとなつて、昔の面影は全く失はれたが、昭和三年隣接三町を合併して約五百町歩を

加へ、面目の幾分を取戻した、これが指導に當る吳市農會は大正十四年の設立で、園藝農作或は果實栽培等を奬勵、實績を擧げてゐるが昭和四年阿賀町に園藝場を設置してからは、農作者に自ら範を垂れ好結果を納めてゐる。

種目	數量	價格	種目	數量	價格
米	二、四九八石	八八、三三五円	大豆	三〇石	五二五円
麥	七、一二五石	八六、六一九	小豆	三三貫	六四〇
雜穀	九八	一、八八八	果實	二〇三、三三六円	八二、八〇九
蔬菜		二〇、〇九一	諸穀	一、三七五、〇〇〇貫	一三、七五〇
馬鈴薯	一〇四、〇〇〇貫	一四、五六〇	甘藷		四六八
養鶏	三三、五六四羽	一七、七八六	養蠶	一〇三、〇〇〇	五三七、四七一
			計		

水産品に見る吳

吳市の漁業は遠く文化年間に始まり、農業に次ぐ繁盛を見せたが軍港が設置され、更に擴張せられてからは都市の發達に逆行して、漸次衰調を辿つたが、吳市水産會の指導で近來漸やく面目を一新し、漁獲生産額も増加して來た。

年次	漁獲物	水産製造場	水産養殖	計
昭和十年	一三〇、六八三円	三八五、九二二円	九、九七八円	五三六、五八二円
昭和九年	一四七、七七八	三七九、八〇七	九、〇六四	五三六、六四九
昭和八年	一五三、九二七	三六六、六七五	一三、〇三七	五三三、六三九
明治三十五年	一四、九六七	—	—	一四、九六七

金融

本市は中央の金融市場に遠ざかつてゐるのと久しい間を消費都市として過した關係から金融界は頗る閑散で、清酒その他の納税期に季節的に多少動きを見る程度であつたが近時商工業の發達は漸やく中央市場に敏感となつて弗々ながら各種投資事業も行はれて來た、しかし市民の殆んどを俸給生活者で占めてゐる關係から銀行は恰も中央の預金吸收地の如き奇觀を呈し昭和十年末現在の市内四組合銀行預金總額は三千七百三十四萬圓に上つてゐるのに對し貸付は僅かに九百六十五萬圓に過ぎない、銀行の外に四信用組合(市街地のみ)、四購買組合、二無盡會社があつて庶民金融機關をなしてゐる。

銀行	銀行數 本店	銀行數 支店	預金總額	貸付總額	數	預金總額 契約高	貸出總額
市内組合銀行勘定	一	三	三七、三四六千円	九、六五八千円	四	三、三四七千円	一、九四九千円
貯蓄銀行	—	二	九、一八三千円	一、八五六千円	無盡會社 二	五、四六八千円	五八六千円

上水道施設

質屋業	店數	貸付件數	貸付金額	流質件數	流質金額
昭和九年	六三	一〇二、七三〇	四三七、二五〇	一〇、九六〇	五一、〇九五
昭和八年	六六	一一五、三〇五	四五四、八一八	一二、〇四〇	五五、六八二
昭和七年	六八	一〇八、一九〇	四五六、一八六	一一、〇五八	五七、七三七

本市は山の手方面を除く外は殆んど水田或は海面の埋立地で水質甚だ惡く、明治三十五年市制を布かれた頃から既に水道布設の要求が高まつてゐたが、尙その緒につかず低地部の住民は個人經營の飲料水會社から運搬する水を一荷幾程で買求めてゐた、しかし日露戰爭が起り本市は軍事上並に衞生上特に必要を痛感するに至つたので俄然上水道布設の緒につき、基礎調査を初めたが、大戰後に於ける海軍の大擴張計畫は安藝郡燒山村（昭和村）に大貯水池を設けたのでこれが分與水をうけ大正四年四月から給水を初めた、第一期事業は經費の關係もあるので低地部方面を主としたが、本市の驚異的發達は忽ちにして高地部方面へ街衢を延ばし、戸口はいよ／＼稠密となつて衞生、防火方面からも看過しがたい狀態となつたので昭和二年第二期擴張計畫を可決、昭和四年舊市內全體に涉る工事を完了、十五萬人に對する給水を開始してゐるが、頂きを知らぬ本市の發展は益々戸口を增し數年を出でぬ今日再び水飢饉の襲來をうけてゐるので、第三次大擴張計畫を樹て、これが實施も目捷に迫つてゐる、尙昭和十年末現在の設備の大要は左の通り

水源地及濾過配水池	水源地位置	廣島縣安藝郡昭和村	濾過池（四箇）	面積	七四〇平方米
			一日濾過總量	一二、五立方米	
			濾過速度	一晝夜 三米	
			配水池	配水總量	一三、五一五立方米
給水戸數	專用栓	一五、三五三	共用栓	七、九三七	
			其他	一、〇九三	
			計	二四、三八三	
消火栓	公設	五三八	私設	五五	
			計	五九三	
鐵管總延長	送水管	三、〇八三、五米	導水管	九五二・六米	
			配水管	一三六、一〇六・九米	
			計	一四〇、一四三米	

吳海軍の偉容

吳鎭守府　吳軍港は世界屈指の軍港で我が國防の心臟部である、現下の國際危機を控へ潑剌たる躍動は列强驚異の的である、吳鎭守府は明治二十三年、畏くも　明治大帝御臨幸のもとに開廳の式を擧げられた由緒深いもので、軍港を一眸のうちに收める塔ケ丘に聳ゆる雄大壯麗な建物がそれである、構內の翠綠滴たる樹木の下は塵一葉も認めぬまでに掃き淨められ觀覽者に淸澄な氣を與へてゐる、人事部、艦船部、經理部、文庫等も構內にある。（吳驛より約十一丁）

吳海軍工廠　精巧無比、優秀な機能と大規模な施設で、我國科業工業界に君臨する吳工廠は日本最大の科學の殿堂で造兵、造機、造船に機械文明の精華を誇り、三萬に餘る從業員は非常時國防充實のた

め、孜々としてその業に勵んでゐる。（吳驛より廿八丁）

吳海兵團　海兵の家庭とも云ふべき所で、海軍に入つたら先づこゝで五ケ月の基礎教育を受け、退團に際してはまた公民教育或は職業指導を此處で受けてゐる、職掌は軍港警衛、防禦、兵員の補充、新兵教育等で地方人とも極めて緣故が深く、軍港觀覽者には團内を解放し或は案内說明等種々便宜を與へてゐる、團内には練習用砲臺、各種教育參考品等海兵教育の諸施設があるが、その他にも地方人憧憬の軍樂隊練習所、大プール等觀覽者の興味を惹くものばかりである。（吳驛より八丁）

吳防備隊　嚢に新設された警備戰隊と緊密な關係を持ち軍港境城海面の防禦に當つてゐる、隊内には可憐よく重大任務を果す傳書鳩々舍がある。（吳驛より八丁）

吳鎭守府

吳海軍々需部　海軍々需品の準備、保管、供給を行ふ海軍のお臺所である、部内には自慢の冷凍倉庫を始め、短時間で數千人分のパンを作る最新式パン燒竈等新時代的設備を誇つてゐる。（吳驛より四丁）

第一上陸場　陸奥、長門の超弩級戰艦をはじめ、聯合艦隊の艨艟六十余隻を一時に收容して尙餘裕嘖々たる吳軍港は、海底深く四季を通じ波靜かにして世界無比

の良港である、港内の艦船と陸地を繫ぐ第一上陸場は海の勇士にとつては懷しい我家の玄關となり、兵員家族にとつては賴母しい懸橋となる、棧橋は東西中の三つに分けられ大小汽艇は日々何百隻となく往復繁忙を極めてゐるが、洗練された水兵の操作は一糸亂れず、誠に驚異の的である、海の勇士にとつて一番樂しい上陸は平素は午後五時頃、土曜日曜は正午頃であるが、半舷上陸の日の波止場は、實に朗らかな一時で、軍港でなければ見られぬ情緖的なものである。（吳驛より七丁）

第六號潛水艇　潛水學校門前には我が潛水艦發達史上に尊い犧牲となり、悲壯な最後を遂げた佐久間艇長以下十三勇士の遺品を保存する養生館、沈沒當時の儘の姿で引揚げられた第六潛水艇等があり觀覽者に解放されてゐる。（吳驛より二十丁バスの便あり）

海軍兵學校　吳軍港の對岸海上約三浬、景勝に富む江田島は、海國日本を背負ふアドミラルの搖籃の地として若人の憧憬の的である、海軍兵學校は明治二年東京に海軍操練所を設けられたに始まり、同二十一年海軍兵學校と改稱されて此の地に移轉したもので、白壁の大講堂は世界的名建築の譽を擔ひ、校内にある海軍參考館は東西古今の名將の遺品、或は世界に得がたい海の參考資料を網羅してゐる。（川原石波止場より三十分毎連絡船あり）

廣海軍工廠　航空機の製作整備工場としては我國の代表的工場である、國防の補充を空軍に俟つ我國策は日々同工場の擴充となつて、優良國產飛行艇をはじめ國產飛行機の製作に繁忙を極めてゐる。（吳驛より二里十丁）

吳航空隊　市外廣村に十餘萬坪の陸上滑走場ができ、吳軍港を中心にした大空は水陸兩機で完全に防禦されるに至つた、毎日行はれる猛訓練は行人の膽を奪つてゐる。（吳驛より二里）

海軍潛水學校　潛水艦は航空機と共に我が國防には必要缺ぐ能はざる武器で、列强中にはこれが全廢を唱へる國もあるが、我國は斷乎として之を排擊し將來の發展を期してゐる、潛水學校は優秀なる潛水艦乘組員を養成する唯一の機關で列强の亦羨望するところである。（吳驛より二十八丁）

吳及近郊の名勝

二河公園　吳驛から西北方へ歩いて約十五分、二河川に臨む約三萬坪の二河公園は先帝陛下の御大典を記念するため、大正四年造園したもので未だ古色には乏しいが、花樹は年と共に繁茂して明鏡の池畔に映え、近代的風致を加へて四時市民の散策は絶えない、園内に設けられた野球場を初め各種運動場はさすが運動王國吳の名に叛かず、日曜祭日には數萬人に達するファンを集め關西稀に見る盛觀を呈してゐる。（吳驛より十丁）

二河峽　二河公園から西北方十數丁に及ぶ溪谷一帶を二河峽と呼んでゐる、奇巖怪石に富み、老樹天日を蔽うて深山幽谷を想はせ、峽谷まるところに男瀧女瀧の二瀑が懸る、此の地に至れば巨巖愈重疊として左右から迫り、老松巖上に蟠踞して飛瀑に臨みその妙趣は眞に一幅の名畫である。しかも市街地にかくの如き峽谷を持つことは全國稀有のことで、同峽を觀賞する雅客の齊しく感嘆する處、近く名勝地として指定せられる予定である。（吳驛より二十六丁）

鯛の宮　二河川を渡り西本通電車停留所から西へ約一丁行けば、愛宕山の麓、鯛の宮に達す、鯛の宮はその昔吳浦の漁民が海の幸を祈るため、釣神事代主尊を祀り鯛魚を獻じたことからこの稱が起きたと云ふ、境内には第六潛水艦殉難記念碑があり中空を摩してゐる。（吳驛より約九丁）

第六號潛水艦殉難記念碑　明治四十三年四月十五日、山口縣新湊沖で潛水訓練中であつた第六號潛水艦は遂に浮かばず、佐久間艇長以下十三勇士は悲壯な最後を遂げた、然も乘員は全員從容自若として自己の部署につき、萬策を盡し、その周到なる遺書は千古不磨の文字として憐夫を起たせ、潛水艦發達史上に光彩ある一頁を飾つてゐる、この烈士不朽の事蹟を後世に傳へるため吳市愛宕山の一角、鯛の宮境内に白堊の高塔を建て、市民は齊しく之を仰いで當年の勇士を偲んでゐる。

湯舟溪　四ツ道路電車停留所から二丁餘、清水通を登りつめたところ、幽雅閑靜な谿谷からはアルカリ性に富む靈泉が湧出でゝ溫冷泉の設備がある、谿谷一帶は古松老杉茂つて三伏の候暑さを避ける者が多い、附近の小丘は眺望によく、その昔弘法大師が諸國巡錫の際開かれた所として有名。（吳驛より約六丁）

平原貯水池　灰ケ峰の麓、藝南電車畑停留所から約五丁の平原高原にある、芝生で蔽はれた貯水池一帶は櫻樹繁つて春は花の名所となる、四ツの濾過池を圍む庭園は松を配して雅趣に富み、池畔は蓉の跡も新らしく清淨な氣を漲らせてゐる、軍港街展望の絶好地。（吳驛より三十四丁）

龍涎峽　吳市外廣大川の上流、古來二級の瀧と稱せられて縣下第一の大瀑布を中心とした一帶を云ふ、既に「名勝地」として推薦されてゐる。近年峽谷一帶に甌穴群を發見され、龍涎峽と命名された、就中全國第二の發見といふ甌穴の瀧壺、底無しの甌穴等は天然記念物の優たるものとして、近く指定をうけることになつてゐる、幽邃閑寂の峽谷、雄壯蓼々たる飛瀑を臨み、點々群在する甌穴を尋ねるのも亦、興趣盡きぬものがある。（吳驛より三里三十丁）

音戸の瀨戸　今を去る八百年前、全盛を極めた平清盛が、嚴島參詣の航路を作るため、切りひらいた

といふ傳說の音戸の瀨戸は

出船入船この瀨戸越せと向ふ音戸の灯がまねく

と民謠にもあるやうに、情緒の港でもある、警固屋と音戸の両岸を洗ふ急潮は月夜の觀潮によく、附近の風光は常に飄客を誘つてゐる、海峽に臨んで清盛塚や、開峽に因む日招き岩等がある。（呉驛よくり一里二十七丁）

安藝の小須磨　呉線仁方驛から海岸通ひの戸田浦一帶で、背後の翠巒、白砂に映えて船からの眺めよ猫瀨の瀨戸を前面に海の景趣また粹人を喜ばす。

月の浦　呉線川尻驛の海岸、觀月、海水浴場としては内海有數のもの、海清く砂白く近時粹客の遊ぶ者多し、附近には清盛松、臥龍松等名木景勝地あり。

小用七浦（呉線安登驛附近）　青松白砂の曲汀あれば、老松巖上より海に臨む絶景あり、或は夫婦岩、小島潟等々造化の神秘には具嘆賞するのみである、この地一帶はキヤンプ、釣魚等によい。

野呂山　藝南地方の最高峰野呂山は、呉市の灰ケ峰と共に人々の親しみ深い山、登り易い山として四時老幼男女の登山多く、山頂よりの眺望は一眸數十里に及び、國立公園瀨戸内海の絶好の展望所である。同山登山口は呉市外廣、川尻、安登の三道がある。

柏島　三津口町海岸から船で約十五分柏島は東の宮島とも稱せられ、翠綠の島は眺めてよく、同島附近は瀨戸内海海上公園の絶景とも云はれる景勝地で、三津口町では四ケ年計劃により同島を一大樂園たらしむべく準備を進めてゐるといふ。（呉線三津内海驛下車）

鸚鵡岩　三津町岩伏山の中腹に鸚鵡岩といふ高さ三丈の奇巖あり、呼べば山彦忽ち應じて人あつ

て物言ふ如く、古來呼び岩と云ひ詩歌にも殘されてゐる、附近一帶は樹木繁つて閑寂風雅を誇り、瀨戸内海眺望の勝地でもある。（呉線三津驛下車）

大乘海邊　竹原町から磯傳ひ大乘村海岸は風光明媚な海邊で前面の多島海の眺めは更によく、賴山陽も幾度か來遊附近の風景を愛賞したといふ、海上三粁阿波島附近は春暖の候すなめり鯨の廻遊海面で扁舟を浮べて見るによく、昭和五年天然記念物に指定さる。（呉線大乘驛下車）

忠海海岸　碧海に浮ぶ點々たる島々、その間を縫ふて行く白帆、この附近の景觀は日本百景の一に推薦せられたものである、町背後に聳ゆる黑瀧山中腹には佛通寺派地藏院の奥の院が移され、絶壁に突出た堂宇は華麗な朱塗で夕陽に映え、同所よりの眺望は内海を一眸におさめて呉線隨一のものである。（呉線忠海驛下車）

竹原町　古よりの文教の地で賴山陽をはじめ忠臣偉人の遺蹟多く、町内は風物秀麗にして西の京都と稱された昔しを偲ぶに充分である、的場公園は内海眺望に絶佳の地、對岸の木の江、鮎崎は情緒豊かな港でオチヨロ船で有名。（呉線竹原驛下車）

能地の浮鯛　忠海、幸崎沖の櫻鯛は日本一の美味、春暖の候にはこの附近一帶は金鱗の鯛無數に浮いて旅人の眼を樂します。（呉線幸崎驛下車）

附近の名勝舊蹟

聖蹟廣島大本營　明治二十七年日清の役起るや、畏くも　明治大帝には廣島市に大本營を御進轉遊ばされ、宵衣肝食、艱苦缺乏に堪へさせ給ひ、只管軍國の大事を鬱はせ給うた、當時の御遺蹟が舊廣

島城内本丸跡にある。御座所を初め御調度品は、いづれを拜し奉つても御簡素なものばかりで、拜觀する者は只大御心の有難さに感泣するのみである。

嚴　島　呉軍港から十五、六浬を距て、日本三景として有名、市杵島姫命を祀る嚴島神社は千三百年前の造營にかゝり、千疊閣、五重塔、紅葉谷公園、大元公園等を配した絶景は全く錦繪の嚴島である。

三段峡　東の帝釋峡に對し西の三段峡は日本百景のうちでも、絶勝を誇る大峡谷で、險崖深く迫つて飛瀑深淵となり、仰げば千古斧鉞を入れぬ老樹が鬱蒼として、眞に峡谷美の極致を示してゐる、廣島驛で下車、三段峡行き乘合自動車がある。

帝釋峡　廣島驛から藝備線に乘換へ庄原驛で下車、約二十キロのバスの便を得れば帝釋峡に至る長峡二十キロに亘る懸崖、洞窟、窪穹等奇勝に富み、配するに清流は飛瀑となつて稀に見る絶景。

鞆の浦　は仙醉島、辨天島を配して風光明媚の景勝で、曩に内務省から名勝地の指定をうけた、仙醉島の島影で行はれる勇壯な鯛網は探勝家に興を添へ、附近の阿武兎觀音の風景も亦遊覽客を喜こばせてゐる。（汽車船舶の便あり）

大三島神社　海の神様として、昔から日本總鎭守の稱ある國幣大社大三島神社は、大山祇尊を祀る愛媛縣に屬するも瀬戸内海國立公園に含まれてゐる景勝の島、呉からは海陸の便あり、約四時間（二十浬）昔水軍華やかなりし頃の繪卷、その他甲冑、刀槍は國寶に指定されたるもの多く、その數は實に日本第一と云はれ恰も、武具の殿堂、鎧兜の博物館である、瀬戸内海を遊ぶ者の一度は訪ふべき史實の島である。（呉線竹原町下車連絡船あり）

呉市歌

野藤　瀬戸の海に
日澤　久遠の光り　仰ふぐ國
雨衛　あゝ新潮の　高鳴りに
情彦氏　天翔り行く　鳳や
共選氏

一、大和島根の　瀬戸の海に
久遠の光り　仰ふぐ國
あゝ新潮の　高鳴りに
天翔り行く　鳳や

呉市　呉市　大呉市

二、二河の流れ　いよ淨く
灰ケ雄峰の　いや高く
めぐしき自治の　わが呉市
愛と正義の　光りあり

呉市　呉市　大呉市

松本清氏作

三、聽け藝陽の　天高く
愛國の鐘　鳴りひゞく
こゝぞわれらの　理想の地
共に讃へむ　大呉市

呉市　呉市　大呉市

330
5-83

昭和十一年十一月二十日印刷
昭和十一年十一月廿五日發行（非賣品）

吳市役所

印刷者　吳市本通十二丁目十五番地　林春雄

印刷所　吳市本通十二丁目十五番地　海軍聯盟印刷所

淡